研究ノート

ジョージ・A・バーミンガムの短篇小説「陳情団」

八 幡 雅 彦

George A. Birmingham's Short Story,"The Deputation"

Masahiko YAHATA

「陳情団」" The Deputation "は、ジョージ・A・バーミンガム（George A. Birmingham, 1865－1950）のユーモア短篇小説集『ウィッティー医師の冒険』*The Adventures of Dr. Whitty*（Methuen, 1913）の冒頭に収められた作品である。バーミンガムの本名はジェイムズ・オーエン・ハニー（James Owen Hannay）で、小説家であると同時にアイルランド国教会、イギリス国教会聖職者であった。「陳情団」は彼の代表的短篇小説であり、バーミンガム自身が編纂した『アイルランド短篇小説集』*Irish Short Stories*（Faber, 1932）と、シェイマス・ディーン（Seamus Deane）責任編集の『フィールドデイ・アイルランド著述選集』*The Field Day Anthology of Irish Writing*（Field Day Publication, 1991）の第２巻のうちにも収められている。

「陳情団」が出版された1913年、バーミンガムは、もうひとつの彼の代表的作品となる喜劇『ジョン・リーガン将軍』*General John Regan* を発表している。この喜劇の舞台は、アイルランド西部の架空の町バリモイで、バーミンガムが1892年から1913年まで教区司祭として暮らしていたウェストポートがモデルと言われている。真夏のある日、人々はあまりの暑さに外に出て働くことをやめ、町はまったく活気が失せていた。この町に高級車に乗ったアメリカ人大富豪がやって来た。目的は、この町に生まれ、後に南米ボリビアの独立のために戦った「ジョン・リーガン将軍」の銅像を見ることと、将軍の伝記を書くための実地調査であると言う。しかし町民は誰ひとりとして将軍のことも銅像のことも知らない。そこに登場したのがルシウス・オグラディー医師で、彼も将軍のことはまったく知らないが、知っているふりを装い、アメリカ人をペテンにかけようと企む。医師は、町議会はまもなく将軍の銅像を建立予定だとうそをつき、完成のあかつきには町に巨額の寄付の約束をこのアメリカ人から取り付ける。オグラディー医師の指揮のもと、町民たちは一致団結してアメリカ人をだましにかかる。町の新聞社は知りもしない将軍の功績をほめたたえる記事を載せる。警察署は将軍が子供時代を過ごした家に、ホテルの経営者の農場にある廃墟が将軍の生家に偽装され、ホテルに勤めるメイドが将軍の親戚に仕立て上げられる。銅像は別人のものを調達し、除幕式にアイルランド総督を招こうというオグラディー医師の提案が可決される。しかし除幕式にやって来たのは総督ではなく彼の副官で、総督はジョン・リーガン将軍のとんでもない正体を知ったが故に除幕式をキャンセルしたと言う。副官はオグラディー医師に将軍の正体について語り、彼を激しい剣幕で叱責する。しかし医師は一向に動じる様子はない。すべての企みが水泡に帰したと思われた時、アメリカ人が現れ、この謎の将軍に関する

真実を語る。そして、アメリカにはオグラディー医師に匹敵する活力に溢れた医師はいないと賞賛し、約束通りバリモイの町に大金を寄付し、除幕式は予定通りに挙行され、物語はハッピーエンドで終わる。

この喜劇が1914年にウェストポートで上演された時、人々は「アイルランド人をこの上なく卑しく狡猾に描いている」と解釈し、アイルランド演劇史上最悪の暴動が起きた。しかし、バーミンガムのこの作品における真の意図は、バリモイの町民たちがあらゆる階級と信条の違いを越えて一致団結し、ひとつの共通目的のために邁進する姿をユーモラスに描いて、ナショナリスト（アイルランド独立主張派）とユニオニスト（アイルランド・イギリス連合主張派）の融和を真に願うことだったように思われる。

バーミンガムは1888年から1950年まで、その生涯の大半をアイルランド国教会、イギリス国教会聖職者として過ごした。1913年に小説としても出版された『ジョン・リーガン将軍』、そして『スペインの黄金』*Spanish Gold*（1908）をはじめとするバーミンガムの約60のユーモア小説に見られる人間愛は、彼の敬虔なキリスト教信仰から生まれたもので、「陳情団」もまた短篇小説の形でバーミンガムの人間愛を具現した作品であるといえよう。バーミンガムのユーモアの真髄を呈示するためにここに訳出を試みた。

「陳情団」

バリントラはコナハト地方の海岸沿いの小さな町だった。ウィラビー氏が、アイルランド内大臣に赴任直後にバリントラ訪問の意向を表明した時、かようなことに関心を抱いている人々は誰もが驚いた。人々の記憶では、いかなる政府高官もこの町に足を踏み入れたことはなかった。というのは、政府高官たちは常にもっと他の土地に行くことを切望しており、それらの土地に通じていない町を訪れる余裕などないからである。バリントラは奥まった湾海沿いの町で、「袋小路」の行き止まりである。この町を訪れた人々は、ここからよそに行こうと思ったら、彼らがやって来た道をもう一度引き返さなければならない。

「たぶん」マイケル・ジェラハティーは、「帝国ホテル」のバーで内大臣の来訪について論じながら、言った。「内大臣はベレスフォード大佐殿と、あの豪邸で一緒にごちそうを食うんでしょうな」

ホテルのオーナー、サディー・グリンはフンと鼻であしらった。彼は、近隣では最大の土地地主であるベレスフォード陸軍大佐とは犬猿の仲だった。

「それともちろん」マイケル・ジェラハティーは言った。「内大臣殿はあそこで一泊なさるんでしょうな」

「いや、それは断じてない」とサディー。「内大臣はこの町で食事もしなければ、宿泊もしない。またすぐに立ち去っていく」

バーのカウンター越しに述べられたサディーの意見は、当然の如く、重みを持っていた。彼はバリントラの名士だった。町議会議長兼ゲーリック・リーグ支部長という肩書ゆえに、彼の言うことに反論の余地はなかった。

「あっしゃ、思いつきを言ったまでのことでして」マイケルは弱々しく言った。「誰よりも先にあんたがご存じでしょうから」

「その通りだ」とサディー。

サディーの情報は完璧に正しいということが判明した。

内大臣の車は12時にバリントラに到着し、その後できるだけ早く立ち去るという予定だった。修道院長と職業訓練校の校長を兼務するマザーが、最初に内大臣を迎えたい旨を申し出た。内大臣は修道院に立ち寄り、職業訓練校を視察した後、教区神父のヘナハン神父と会見するということになった。このスケジュールは教会関係者には極めて満足がゆくものだったが、これでは他の町民たちがこの視察によってどういう利益が得られるのか不明だった。人々は、ウィラビー内大臣の訪問によって明らかな利益が得られる方法を提案して欲しいとサディー・

グリンに頼った。サディーは躊躇した。彼は、内大臣が彼のために何をしてくれるのか見当が立たなかった。彼は、町議会議長という肩書ゆえに、すでに治安判事でもあった。彼は、内大臣が授けてくれるこれ以上の名誉あるいは役得を思いつくことができなかった。彼が躊躇している間に、ウィッティー医師がある計画を携えて人々の前にさっそうと現れた。それはさほど独創的ではないが、実用的な計画に見えた。彼は、町の利益のために桟橋を作ってもらうことをウィラビー内大臣に陳情しようと提案した。

マイケル・ジェラハティーは暖かく医師を支持した。彼の職業は建設業で、バリントラで桟橋建設の契約が与えられる可能性がある唯一の人物だった。彼は、この仕事から莫大なもうけが得られると踏んだ。彼は一晩かけて、紙の上で、費用を計算した。そしてかなりちっぽけな桟橋からでも２百ポンドのもうけは得られるはずだ、もし彼の仕事を認可する視察官が間抜けであればもっと莫大なもうけが得られるかもしれないとの結論に達した。彼は翌朝医師を訪ね、桟橋を確保するためなら力の限りを尽くす意思があると伝えた。

「もし桟橋ができたら、この辺の連中にとっちゃ大そうな利益になりますわ。サバだって、ニシンだって、他の魚だって、引き上げる方法さえありゃ、たんと獲れるでしょう。だけんど、海へ行って魚を獲ったないいが、引き上げようとして足滑らせて死んでしもうたら、何にもならんじゃないですか。食いぶちを頼っとる女房とガキがいるというのに」

「その通りだ、マイケル」

「この町の連中にとって本当に利益をもたらす一番のものっちゅうたら、立派な桟橋を作ることですわ。そしたらもっと多くの命が助かって、もっとこの町にお金が転がり込みますわ」

「もうよく分かった。その手の話は内大臣にしてくれ。内大臣がこの町にやって来た時、おまえが望むなら、溺れ死んだ漁師たちの死体を道に並べて見せてやってくれ。未亡人と孤児たちを整列させて見せてやってくれ。この町に桟橋さえあれば魚で一杯になるかもしれない、空っぽの荷箱を内大臣に見せてやってくれ。きっと内大臣は心を揺さぶられるだろう。しかし、私に向ってそれ以上くどくど話さないでくれ」

マイケル・ジェラハティーは医師を疑わしげに見た。それからゆっくり笑顔を作って言った。

「先生、あんたがお望みなのは、この町の餓えた連中に仕事を与えて下さるってことですよね。何の罪もない、貧乏人どものために。それで、神のご加護で、桟橋を作る金さえ国からもらえりゃ、仕事が手に入りますがな。先生が考えられとるのは貧乏人のことですよね。だから、あっしゃ、先生を尊敬申し上げとるんです」

「私は貧乏人のことなど考えていない。私のことを政治家だとか博愛主義者だとか思わないでくれ。私がこの桟橋計画をやり遂げるつもりなのは、国からもらえる金があるのなら、他のところに持って行かれるくらいなら、バリントラがその分け前に与かる方がましだからだ。それが私の考えだ。おまえが考えているのは、その仕事からどれくらい稼げるかということだろう。今、おまえの頭の中にはそれ以外の考えはないだろう」

マイケル・ジェラハティーは再び苦笑した。そしてゆっくりとウインクした。

「図星ですわ。先生は本当に賢いお方だ。あっしゃ、いつも先生は賢いお方だと言っとりますが、まだ言い足りんですわ」

「しかし、桟橋の約束を取り付けるのはおまえが思っているほど簡単ではない。昔は、申請するだけで許可がおり、コナハトの海岸じゅう、望めばどこでも桟橋を作ってもらえた。しかしその時代はとっくに過ぎ去った。桟橋については、国は今ではかなりうるさくなっている。過去２代の内大臣は、桟橋ひとつ作るのに千ポンドを相当出し渋った」

「なんたる恥。内大臣などおっても何の役にも立ちゃしませんがな、もしそいつが・・・。政府に強く言える奴がおりゃいいんですがなあ、まったく」

「われわれがしなければならないことは」医師は言った。「もっとも立派な、影響力がある陳情団を内大臣に引き合わせることだ。内大臣が絶対に会見を断れないような陳情団をだ」

「そりゃ名案です。先生と、あっしと、ヘナハン神父と、えーと、それから…」

「それでは話にならない。おまえと私は加わる資格がない。何の役にも立たない。まともな内大臣ならおまえと私が言うことなどに耳を傾けてくれるはずがない。もちろん、ヘナハン神父には加わってもらう。ヘナハン神父の役割は、内大臣を修道院の職業訓練校に案内した後すぐに陳情団に引き合わせることだ」

「神父さんならやってくれますわ」

「もちろんやってくれるとも。神父なら喜んで陳情団に加わってくれるだろう。次に私はジャクソン司祭に頼みに行く。それから…」

「あのプロテスタント司祭の野郎ですか！あいつが桟橋のことについて、内大臣と桟橋の関係について、何が分かるっちゅうんですか」

「何ひとつ分からないとも」医師は言った。「しかし司祭は大いに役立つ。何よりも内大臣の心を動かすのは、ひとつの共通の目的のためにあらゆる信条の人間が一致団結しているということだ。ヘナハン神父とジャクソン司祭が手に手を取り合って内大臣の車の前に立っているのを見たら、内大臣は、ちっぽけな桟橋はおろか、望めば灯台さえ作ってくれるだろう」

「恐らくジャクソン司祭は断りますわ。あいつはかなり変わった奴だと聞いとりますから」

「いや、素晴らしい人物だよ。先月、司祭の子どもたちがハシカにかかった時、私が診てやったのだ。それでとても寛大な人物だということが分かった。今おまえが言った失業中のかわいそうな連中と、建設の仕事が賃金面でもたらす利益のことを話したら、司祭は即座に陳情団に加わってくれるだろう。ここまでは何ひとつ難しいことはない。陳情団に加えなければならないもうふたりは、ベレスフォード大佐とサディー・グリンだ」

「冗談じゃねえ！」ジェラハティーは言った。「あいつらが加わるなんて、あのふたりが一緒に加わるなんて絶対ありっこねえですよ。そりゃどちらかひとりが加わるってこたあ、あるかもしれませんですが」

「マイケル、どんな手段を尽くしてもあのふたりを加える必要がある。もし大佐が加わらなければ、内大臣は、すべては作り芝居だ、桟橋など本当は必要ないと思うだろう」

「ひょっとしたらですなあ」

「そう思うかもしれない。いや、そう思うだろう。それに、ここだけの話だが、内大臣がもしそう思ったとしても、それはまぎれもなく正しいのだ。だからこそ大佐には必ず加わってもらう必要がある」

「そりゃ絶対無理ですな。サディーが陳情団の一員だと知ったら、絶対加わりませんぜ。大佐はサディーのことを悪魔よりも嫌っとりますから。そんで、もしサディーの奴を外したら…」

「サディーは絶対外せない。この地方のありとあらゆる委員会とゲーリック・リーグの長である以上、サディーは非常に重要な人物だ。彼は内大臣の心を強く動かすだろう」

「もしあいつを外したら、あいつはバリントラの連中を総動員して反対運動をやらかしますぜ。桟橋が道のど真ん中にぶち込まれるかのようにわめき散らして、話をダメにしちまいますぜ」

「その通りだ。それがサディーには是非加わってもらわなければならないもうひとつの理由だ。サディーがいなければ桟橋を手に入れることはできない」

「サディーと大佐、ふたりをいっしょに加えるなんてこたあ、絶対無理ですわ」ジェラハティーは落ち込みながら言った。「絶対無理ですわ。この世に生きとる人間、誰ひとりとしてそんなこたあできませんわ。もし大佐が加わったら、サディーの奴が断りますわ。なにせあいつは、大佐があいつを嫌っとるのと比べものにならんくれえ、大佐を嫌っとりますから。そんでもし先生がサディーから加わる約束をお取り付けなさったら、大佐はボロクソに言って、内大臣のそばなど近寄るもんか、生きとる間二度

と内大臣に会うことができんでも絶対近寄るもんかって、わめき散らしますぜ」

「私がふたりとも加わってもらうと言ったら、絶対そうするつもりだ。いいか、マイケル、これから私の言うことをよく聞け。私は今からヘナハン神父とジャクソン司祭のところに行ってくる。彼らは問題なく同意してくれるだろう。おまえはホテルに寄ってサディー・グリンに会って来てくれ。そして私から陳情団入りを要請されていると伝えてくれ。私はベレスフォード大佐にも陳情団入りを要請していて、大佐が加わってくれることは確実だと言ってくれ。なんなら、大佐はすでにOKしたと言ってもかまわない。それからここに戻って来て、サディーが何と言ったか教えてくれ」

「あいつがなんちゅうか、行かんでも分かり切ったことですわ。あいつは、そんなバカげたことするくれえなら、先生、あんたとも、大佐とも、内大臣とも、バリントラの町とも一切関わりは持たぬと言いますわ」

「いいから、出かけて行って私の言う通りにしてくれ。この芝居は私の思い通りにやらせてくれ」

マイケル・ジェラハティーは1時間もしないうちに医師のところに戻って来た。彼はビール2本とウィスキー1杯飲んでいたが、上機嫌と言うにはほど遠かった。そして言った。「先生、あんたの計画はきっと失敗しますわ。サディー・グリンの奴、そんな陳情団とは一切関わりを持たんとエライ怒りゃがりました。先生のことをおせっかいでアホな若造だと罵りゃがりました。ベレスフォード大佐をどんだけ憎んどるか、新聞に投書して、桟橋計画はすべてインチキだ、民主主義の基本原則からゲーリック・リーグを惑わすための、卑劣で、卑怯極まる陰謀だと暴露してやると脅しゃがりました。ベレスフォード大佐のような名だたる民衆の敵が、この手の運動に関わるのはスキャンダルだとまで言やがりました。あっしゃ、サディー・グリンがどれほど権力と影響力を持っとるか、よーく知っとりますから、内大臣から何かを手に入れるなどどだい無理ですわ。以上、報告申し上げますわ」

そして彼は最後に付け加えた。「あっしゃ、先生に、最初からそうなるこたあ分かり切っとったと申しあげたでしょうが。とんだ無駄足でしたわ」

ウィッティー医師はこの報告をこの上なく嬉しそうに聞いた。

「でかした、マイケル。サディーには是非ともそのようなことを言って欲しかったのだ」

「そんなことでお喜びになるたあ、先生もおめでたいお人ですなあ」

「私は今から大佐のところに行って来る。おまえは明日の2時に私の家に来てくれ。私が昼食を取っている時間だ。次におまえがサディー・グリンに言って欲しいことを伝えるから」

ウィッティー医師は自転車に乗って、大佐の敷地の入口まで行った。門番の子どもに明るくあいさつし、長くて影になった並木道を自転車を飛ばした。彼は、ベレスフォード大佐が邸宅の前のバラの木から枯れた花を切り落としているのを見た。医師は即座に用件を切り出した。

「大佐は、新しく赴任したウィラビー内大臣が明後日この町にお立ち寄りになられるのをお聞きになったことと思います。そこで、バリントラに桟橋を作っていただくためのお願いに上がる陳情団を結成いたしたいと考えております」

「一体どうして内大臣に桟橋を作ってもらう必要があるのかね」

「ええ、それは必ずしも桟橋である必要はございません。鉄道でも、その他の何でも結構でございます。桟橋が一般的なものですので、御提案申し上げる次第です」

「しかしなぜ内大臣に何か作ってもらう必要があるのかね」

「私もなぜだか分かりません。しかし、実際のところ、大佐、あなたも今までご覧になってきたに違いないと思うのですが、内大臣は皆アイルランドに赴任して来たら多くのものを作ります。おそらく人々から人気を得られると思ってのことでしょう。もちろん、それは間違いな

のですが、彼らは長い間、それが間違いであることに気づきません。私たちの考えは、桟橋であれ何であれ、手に入るものがあればその分け前に与らなければ損だということなのです」

「分かった。こんな町に桟橋を作ってくれるバカな男がいるのなら、あんたができるというのなら、あらゆる手段を尽くして、手に入れるといい。漁船の邪魔にならぬよう、どこかはずれに作るつもりなのだろうな」

「もちろん、そのつもりでございます。私は、大佐がそのような見解をお持ちであることを嬉しく思います。と申しますのは、大佐にも陳情団に加わっていただきたいからでございます」

「他に誰が加わるのかね。内大臣をだまして桟橋を作らせるという目的だけのために、私はゴロツキどもと一緒になりたいとは思わん」

「今しがた、ジャクソン司祭が加わることを約束して下さいました」

大佐は唸った。大佐はジャクソン氏の能力をさほど高く評価してはいなかったが、ゴロツキとまでは言うつもりはなかった。

「それからヘナハン神父でございます」

「それから他に」

「大佐、あなた自身でございます」

「ウィッティー先生、よいか、そんな風に名前をひとつひとつ小出ししても何の役にも立たんぞ。いずれあんたは、サディー・グリンもそのうちのひとりだと言わねばならんだろう。わしは断言するが、あいつとは一切関わりを持つつもりはない。ここの湾に軍港を作るためだと言っても、わしは絶対陳情団に加わるつもりはない。たとえあんたがわしに千ポンドくれると約束しても絶対に加わらん。あの悪党は、過去十年間、ありとあらゆる機会をとらえて、わしをこの上なく下品な方法で罵ってきた。ウィッティー先生、わしはあんたに感謝されることだったらいくらでもする。しかし、どんなキリスト教国の内大臣を喜ばすためだからといっても、グリンの奴と仲良く肩を組んで歩くことだけは絶対にするつもりはない。だからあんたの頼みは聞けぬ」

「マイケル・ジェラハティーがですね・・・」

「マイケル・ジェラハティーのことなどどうでもよい。あいつは桟橋の約束が取り付けられたら、あいつが作ることになると思っておるだけのことだ」

「その通りでございます。しかし、私が大佐にお話ししたかったのは、マイケル・ジェラハティーによれば、サディー・グリンは陳情団に加わるつもりは毛頭ないということでございます。サディーはその話を聞いたとたん、気が狂ったように罵りわめき散らし、即座に拒絶したとのことでございます」

「あいつがか。それは驚いた。あいつのことだから喜んで引き受けたと思ったのだが」

「いや、そうではないようでございます。ところで、大佐、もし私があなたでございましたら、サディーをギャフンと言わせてやろうと思います。サディーは、自分がいなければ桟橋は絶対手に入らないと思っております。もし大佐が陳情団に加わっていただいて、桟橋を手に入れることができたら、サディーはこれから１年半の間、バリントラではもっとも落ち込んだ男になると思います」

大佐はクッ、クッと笑った。彼はできればサディーにいっぱい食わせてやりたいと思っていた。もうひと押し、ふた押し説得されて、大佐は陳情団入りに同意した。

「感謝申し上げます」医師は言った。「大佐を頼りにいたしております。明後日の12時半、修道院の外でお待ち申し上げております。どうぞよろしくお願いいたします」

翌日の晩、マイケル・ジェラハティーは、ウィッティー医師から細心の指示を受けて、目の前の交渉の難しさを十二分に認識したうえで、「帝国ホテル」にブラリと入りバーへと近づいた。そしてサディー・グリンからビールを１本注文し、遠まわしに用件を話し始めた。

「信じられねえことですが、分別があって然るべき連中が、アイルランド国民と、国民の利益になるかもしれねえことに対して悪意を抱いとります」

「その通りだ」

「ところで、あんたは信じねえでしょうが、

あの豪邸の大佐、内大臣殿に会う陳情団の中にあんたの名前が含まれとると聞いたとたん・・・」

「わしは絶対加わらない。以前、おまえに言った通りだ」

「ウィッティー先生の方を向いて言ったことが『最悪のゴロツキ』ですぜ。しかもそんなの序の口で、もっとはるかにえげつねえこと言ったんですぜ。大佐が他に言ったことといったら、あっしゃ繰り返すのもおぞましいくらいですわ」

「なんだと。それは本当か」

「ホントですわ。そればかりか、大佐はわしが行って頼まん限り桟橋は絶対手に入らんとまでのたまって」

「そんなことまで言ったのか」

「ああ、言いましたとも。それに、もちろん、そりゃ事実ですがな。大佐のようなえらいお方がこんな町に桟橋などいらんとおっしゃったら、誰がこの町の連中のために桟橋など作ってくれますかな」

「あいつが『最悪のごろつき』と言ったのはわしのことか」

「左様で。しまった、あっしゃ口をすべらしてしまいました。でももう口から出てしもうたから、仕方ないですわ。でもあんたはたとえあっしからそれを聞かんでも、他の奴から聞くことになっとったでしょう。だからどっちみち同じですわ」

「思い知らせてやる。あいつが二度と忘れることができない教訓を思い知らせてやる」

「そんなこと言うても無駄ですわ。あんたにゃそんなことできません。大佐はあんたなんかにゃ目もくれませんぜ。大佐が嫌がっとることはただひとつなんです。あんたにゃできんことです」

「それは何だ」

「この町のために桟橋を作らせることですわ。もし大佐の手を借りずにあっしたちが桟橋を手に入れたと知った時にゃ、大佐は気ちがいになって怒るでしょうなあ。でもあんたの力じゃできません。じゃから話しても無駄ですわ」

「わしが真剣にやれば必ずできる」

「あんたにゃ無理ですわ、サディーのおやじさん。言っちゃわりいですが、あんたは今取り乱してらっしゃる。まあ、取り乱すんも無理ありませんわ。大佐に言われたことにムカッぱら立てて、あんたは何でもできると思っとられる。でもあんたじゃ桟橋を作ってもらえません。あんたの言うことなんかにゃ内大臣は耳も貸しませんわ」

「内大臣にはわしの言う通りにさせてみせる。もしわしの言う通りにしなければ、痛い目に遭わせてやる。もしわしの言うことを聞かなければ、国会で追及してやる。それは内大臣も好まないことだ」

「どっちにせよ、あんたはやって下さらんのですよねえ。たった今、あんたは何があっても陳情団には加わらんとおっしゃったばかりじゃないですか」

「わしはそう言ったかもしれないが、もし言ったとしたら、それは、心ではアイルランド国民の利益など考えておらん連中が背後で糸をあやつっているインチキ芝居だと思ったからだ。しかし、今、わしの考えはまちがっとることが分かった。わしは行く、そして全力を尽くすと医者に伝えてくれ。何時の予定だ」

「12時ですわ。内大臣殿は12時に修道院の職業訓練校にやって来ることになっとりまして、外に出てきたら陳情団が会うことになっとるんです」

「わしもそこに行くと医者に伝えてくれ」

「ビールをもう１本」ジェラハティーは言った。「あんたの幸運を祈って」

内大臣は、アイリッシュ・ツイードの藤色のドレスを着た魅力的な夫人を伴って、時間どおりにバリントラに到着した。ヘナハン神父が随行し、修道院のマザーに導かれ、ちょうど町の時計が正午を打った時、一行は修道院の中に入った。12時10分、ウィッティー医師が到着し、内大臣の車の到着を見ていた群衆の喝采を受けた。５分後、教区司祭のジャクソン氏が現れた。彼は、この機会のためにと、幾分流行遅れのシルクハットをかぶっていた。顔はほて

り、緊張している様子だった。群衆は、この上なく上機嫌で、彼にも喝采を送った。12時20分、サディー・グリンとマイケル・ジェラハティーが連れ立ってホテルから出てきて、修道院の門のすぐ外に陣取った。群衆の中の誰かが「神よ、アイルランドを救い給え」を歌い始めた。その祈りの歌は、サディー・グリンがアイルランド国民の世論を代弁する名士であることを考慮に入れれば適切なものだったが、いかなる悪意も持たずに歌われた。誰ひとりとしてグリン氏が神の道に外れたようなことをするとは思わなかった。次いでベレスフォード大佐が、よく手入れの行き届いた馬に引かれた馬車に乗ってやって来た。歌はただちに止んだ。アイルランドの群衆は常に礼儀をわきまえている。アイルランドの繁栄を祈る歌は、ベレスフォード大佐を侮辱することになるというのは、当然、誰もが感じていた。ウィッティー医師は、馬車から修道院の門へ、修道院の門から馬車へとチラチラ目をやりながら、成り行きを不安げに見守っていた。サディー・グリンはアッと驚き、それに伴う彼のしぐさから察するに、激しい罵倒の言葉を発したように見えた。大佐は進み続けた。マイケル・ジェラハティーがサディーの腕をつかみ、彼に何かを熱心にささやくのをウィッティー医師は見た。すると今度は大佐が馬をグイと引っ張って止め、修道院の門の方に激しい怒りのまなざしを向けた。ウィッティー医師は一刻も無駄にできないと感じた。彼は飛び出し、大佐の馬車のそばに駆け寄った。

「大佐、おはようございます。ちょうど間に合いました。内大臣は修道院の中におられます。２分もしたら外に出て参ります。ジャクソン司祭はこちらにおいでです。ヘナハン神父は中におられます。準備万端整っております。どうぞ馬車からお下りになって下さい」

大佐はそれに応えて、ムチを鞘に収め、腕を上げ、サディー・グリンを指差した。ウィッティー医師は前かがみになり、はっきり聞こえるように小声で言った。

「存じております。あのけだもののサディー・グリンでございます。あいつは町のごろつきどもを携えて、妨害するためにやって来たのです。内大臣が外に出て来ると同時に連中をけしかけて、野次やブーイングやその他の手段で妨害するつもりなのです。それぐらいことをやる奴だろうとは思っていました。でも決して気になさらないで下さい。ヘナハン神父が陳情団を紹介することになっておりますから。まったく問題はございません」

大佐は、軍人にふさわしく体をまっすぐに伸ばし、そして断固たる決意の表情を示した。ウィッティー医師は、肩越しに、サディー・グリンが動かないままでいるのを見て安心した。マイケル・ジェラハティーは医師の指示通りに行動し、サディーに、ベレスフォード大佐は内大臣に桟橋を作らぬよう説得するためにやって来たのだと告げていた。大佐は馬車から下りて、威風堂々と道を渡った。ジャクソン司祭が彼に加わった。ウィッティー医師は不安げに修道院の入口の方を見た。危機一髪の場面だった。ウィッティー医師は、内大臣が、マザーが案内を予定している以上のものを見たいという「罪深い」欲求にかられて、外に出てくるのが遅れることなどないようにと心から願った。その心配の必要はなかった。ウィラビー内大臣は思いやりがある人物だった。彼は場をわきまえた質問をし、彼のすぐ目の届くところにいる少女たちの頭を撫でただけだった。12時半ちょうど、内大臣はマザーと握手し、修道院の入口から外に出て来た。大佐、ジャクソン司祭、サディー・グリンが彼に近づいた。ヘナハン神父は、それまで会話していた内大臣夫人のもとを離れ、そそくさと正面に進み出て、脱帽した

「バリントラの代表的名士一同から成ります当陳情団を閣下にご紹介できますことは、私にとりましては光栄の至りでございます」

マイケル・ジェラハティー率いる群衆は、やんやの拍手喝采を送った。ウィラビー内大臣も帽子を取った。内大臣夫人は背後で会釈した。

「こちらはプロテスタント教区司祭のジャクソン司祭でございます」ヘナハン神父は言った。「その慈悲深さとキリスト教的行いゆえにすべ

ての階級、すべての信条の持ち主から尊敬されております。この教区では、あらゆる信条の持ち主が調和して、仲良く暮らしております」

ジャクソン氏は、帽子を手にとって、一歩進み出て、ウィラビー内大臣に会釈した。ウィラビー内大臣は暖かく彼と握手した。群衆は再び拍手喝采した。

「こちらはベレスフォード陸軍大佐でございます。閣下は以前にも大佐のことはきっとお聞きになったことがおありだと拝察いたします。そしておそらくは・・・」

ウィッティー医師はサディー・グリンの方を見た。幸いにして群衆は再び拍手喝采した。サディーは一瞬躊躇し、激しく睨みつけた。

「おそらくは、」ヘナハン神父は続けた。「今日ここにベレスフォード陸軍大佐がおりますことは、私どもの閣下に対します陳情が、正当で、理にかなっていることの証拠であると申しあげてもよいかと思います」

内大臣はベレスフォード大佐と握手し、夫人を紹介すると、夫人はニッコリとほほ笑んだ。群衆は声を限りに拍手喝采を送った。

「こちらは」ヘナハン神父は、嫌がるサディー・グリンの腕を取って前に出させた。「私の無二の親友サディー・グリン氏でございまして、帝国ホテルの支配人をいたしております。また当町の名士でございまして、治安判事と救貧委員会会長も兼務いたしております」

ベレスフォード大佐は顔を真っ赤にした。大佐は内大臣夫人の手前上、怒りを爆発させることを必死で抑えているのだとウィッティー医師は推測した。なによりも大佐は紳士だった。そして彼のそばにいる内大臣夫人の感情をおもんばかった。医師は大佐から二、三歩離れた。

「当陳情団が閣下にお知りおきいただきたいのは、」ヘナハン神父は言った。「桟橋がないがためにバリントラ町民が被っております損失のことでございます。当海岸水域におきます漁業の発展が、当町の恵まれぬ住民に対して同情的な政府が授けていただける最大の利益でございます」

神父は、群衆の拍手喝采に鼓舞されて、この彼自身の言い出しの言葉にすっかり気持ちは高ぶり、我を忘れて話し続けた。ウィッティー医師でさえか、これから先何が起こるのか不安になってきて、話を止めて欲しいと思い始めた。もちろん、最終的には神父は話すのを止めた。たとえアイルランド漁業の発展という魅力的な話題であっても、いつかは話を止めなければならない。内大臣の答えは短く、満足のゆくものだった。彼は、アイルランドじゅうのすべての階級と信条の持ち主の団結を見ることほど自分にとって嬉しいことはないと述べた。

「私は、アイルランドは相当長年に亘って分裂し、憎しみ合いを続けておると思っていた。しかし、私が今日会見した陳情団のうちに、私は、その憎しみ合いの時代はとおに過ぎ去り、幸福な時代が到来しておる明らかな証拠を見た。バリントラ町民は望む桟橋の建設を当てにしてもよい。桟橋建設に必要な費用がまもなくおりるよう私が取り計らう」

そう言って、内大臣は陳情団のひとりひとりと握手を交わし、夫人を車に乗せ、運転手に命じ、バリントラを後にした。

「ウィッティー先生、」大佐は言った。「あんたはわしの面目をまる潰しにした。わしはあんたを紳士と思って、あんたの言葉を信用しておった。ところがあんたは・・・」

「大佐、あなたが非難なさるべき人物は」医師は言った。「マイケル・ジェラハティーでございます。マイケルは私にはっきり、サディー・グリンは陳情団に加わることを断固拒否したと申しました。マイケルの言葉は信用するに足る十分な理由がございました。そこで実際に私は彼の言葉を信用いたしました。彼は確かにそう言ったと、私は今でも信じております。大佐、よろしいでしょうか、よくお考えになって下さい。あなたは私をお責めになることはできないと思います。と申しますのも、グリンは最後の最後になって心を変えたではないですか」

「いや、わしはあんたを責める。わしは…」

「もしジェラハティーが、今、サディー・グリンと命がけで戦っていて負けそうになっていないのでしたら、呼んで来て彼の言ったことを

認めさせるのですが。あれをご覧になって下さい」

医師は、マイケル・ジェラハティーがサディー・グリンから頭を殴られそうになっていて、パンチを防いでいるところを指さした。ヘナハン神父は両手を上げて、ふたりのまわりをとび跳ねながら、ケンカを止めようとしていた。

「あれをご覧になって下さい」とウィッティー医師。「サディーはあなたに匹敵するくらい怒り狂っていますよ」

ベレスフォード陸軍大佐はユーモアのセンスがあった。彼はサディーと、哀れな犠牲者の方をチラリと見て、医者の方を睨み、ヘナハン神父をチラリと見て、医者にほほ笑みかけ、そして最後には馬車に乗って去って行った。

夕方、マイケル・ジェラハティーは医者の家にやって来て、おかげでひどい目にあったと文句を言った。

「サディー・グリンの奴、気ちがいみてえに怒り狂ったじゃないですか。神父さんがいなけりゃ、あっしは殺されとったところですわ」

「おまえはなんともないじゃないか。おまえがなぜ文句を言うのか私には分からない。骨一本折れていないし、桟橋も手に入ったじゃないか」

「サディーは生きとる限り二度とあっしに口を聞いてくれませんわ」

「そんなことはないとも。おまえが桟橋から２百ポンド儲けられると知ったら、サディーは今まで以上におまえと仲良くするよ。だって、いいか、もしおまえがよそのバーでその金を全部飲み尽くしてしまったら、サディーにとってはエライことになるからな」

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金助成（基盤研究（C)・課題番号19520283）による研究成果の一部である。